

BIG対談

市長候補 大いに語る!

飯島よしう vs 清元ひでやす



飯島 義雄氏

プロフィール

- ・1959年姫路市生まれ
- ・1983年東京大学卒
- ・同 旧自治省入省
- ・2005年福井県副知事
- ・2008年総務省消防庁
防災課長
- ・2011年姫路市副市長
- ・現在:関西学院大学
大学院客員教授



清元 秀泰氏

プロフィール

- ・1964年姫路市生まれ
- ・1988年香川医科大学卒
- ・1992年テキサス大学
研究員
- ・2011年東北大
医学部教授
- ・2014年文部科学大臣
賞受賞
- ・現在:東北大客員
教授

事務局： 本日は大変お忙しいところ有難うございます。我々屋保連は「播州屋台会館(仮称)」建設を目指す一つとして、既に20年余り活動をしておりましたが、本年4月20日に「姫路城・姫路藩等 屋台装飾所縁 報告書」(最終面④参照)を石見利勝姫路市長に提出しまして、合計4つの提案を正式にした事にならぬのですが、これで一応、行政への公式な活動は一区切りついたのかなと思っています。

この事を踏まえて、来春の姫路市長選挙に立候補表明されているお方に、会館建設に対するご意見なり抱負なりを忌憚なく語って戴こうと思います。

先ず姫路市長選挙に立候補しようと思われた動機からお聞きします。年長者という事で飯島さんから。

二人とも姫路生まれ

飯島氏： 私は姫路に生まれまして、親戚が沿岸部の祭りどころに住んでいた事もあって、播磨の豊かさを感じられる祭りが大好きでした。

大学を卒業して旧自治省に入り役人になりましたが、姫路はお城を除けば全国でも知名度が低く、愛媛県にあると間違われたりもしました。しかし全国での勤務を通じて、姫路は日本一豊かであると確信しました。いつか故郷の姫路に帰り、自分の行政経験を活かして、祭り文化等姫路の豊かさを更に磨き上げ、世界にアピールしたい、これが出馬の動機です。

事務局： 続いて清元さんお願いします。

清元氏： 私も姫路生まれの姫路育ちです。浜手ではないのですが母の里が豊富で、小さい頃から祭りには親しんで来ました。

大学からは県外へ出ましたが、姫路へ帰ろうと思った理由は、東北大震災の復興に携わっていた折に、そのプロジェクトの中で現場を担当して、医療・人命・生活を守る観点から、政治のパワーと重要性とを強く感じましたので、この道に進もうと決意しました。

事務局： お二方とも姫路のご出身という事ですが、祭りに対するイメージをどうお持ちですか?

飯島氏： 役人時代の28年間、全国47都道府県をくまなく回り、地域活性化の仕事を手掛けて来ましたが、数多く各地の祭りを見て来た中でも播磨・姫路の祭りはトップレベルにあると思います。

これは屋保連のある会員地区でお聞きした話です。その地区は以前は大屋台がありましたが、一度手放し何十年後に復活させました。その復活させる過程で、老若男女が分業でそれぞれ役割を担いながら一体感が増し、コミュニティが強くなり、地域福祉や防災訓練レベルも上がったという事でした。これは人口減少・高齢社会が進む中で、祭り文化によってフェイスtoフェイスの関係が築かれたからこそ、福祉にも防災にも祭り文化が大きく貢献し得ている実例ではないでしょうか。

事務局： 清元さんは如何ですか?

屋保連ならでは、と言うか屋保連しか出来ない“BIG対談”が、8月8日実現した!

来年(2019年)春には、4期務めた石見利勝氏の後継姫路市長を決める選挙が行われるが、その市長選に立候補を表明している飯島よしう氏と清元ひでやす氏とに、屋保連のこれまでの活動に対する評価や、「播州屋台会館(仮称)」についてどう考えているかなど、核心を衝く熱いトークが1時間半に亘って繰り広げられた。

事務局： 屋保連は平成20年(2008)に、姫路市の強い要請を受け、姫路葉子博2008で「匠の技—播州祭り屋台伝承展」を開催し、その来場者にアンケートをお願いし3,357枚(回収率78.3%)の有効回答を得ました。(最終面③参照)

その中には過去6回(当時)行った展示会の来館者数の統計も取っているのですが、集客力をどう評価されますか?

飯島氏： 短期間によくこれだけの来場者を集めたと思います。市民の関心の高さの表れですよね。やはり祭り文化は姫路城と並ぶ大きな宝です。

清元氏： 当該の展示会は場所(イーグレひめじ)が良かった事もあるでしょうが、集客力には目をみはるものがあります。特に私は、6割の方がもう一度来たいと答えている事に注目したいですね。

事務局： 段々と核心に近づく質問をさせて戴きますが(笑)、「播州屋台会館(仮称)」の必要性をどうお考えですか?今度は順番を逆にして、清元さんからお願いします。

屋保連の苦労に対し行政が支援

清元氏： 屋保連さんが苦労をされて来た、祭り文化を未来に引き継ぐためにも、行政の支援が必要である事を痛感しています。臨場感溢れる体験施設の併設、VR(ヴァーチャルリアリティ)を駆使して見せ方の工夫、音声や映像の劣化を防ぎ、後世に残るアーカイブとしてのデジタルマスター化を支援していくべきと思っています。

事務局： 飯島さんは如何でしょう?

将来への継承の証として

飯島氏： 地域コミュニティの継承・発展、地域ブランドを高める観点から屋台会館は必要だと思います。加えて、文化・豊かさの発信、観光の視点、調査・研究・保存の観点からも、将来への継承の証としても必要です。

事務局： なかなか心強いお話を戴きました。只、ハコモノに対する批判も根強くありますし、赤字施設は非常に厳しい目で見られます。提案書提出後、姫路市でも全国の同種施設を8~9箇所調査してくれたのですが、黒字施設は1箇所だけという結果でした。赤字でも市民の理解が得られるコンセプトとか仕掛けがあればお伺いしたいのですが。

それともう一つ、政教分離を如何にクリアするかという問題が残っています。

宿泊客増・教育利用度を評価軸に

清元氏： 恐らく赤字になるでしょうね(笑)。しかし施設の評価軸はそれだけではないと思います。私はむしろ「姫路全体として宿泊客が増えたのか?」「子供達の文化・教育施設としての利用度があるのか?」等、単純に収支だけではなく、文化施設としての評価軸の設定が重要であると考えます。

それと政教分離の問題は、作りたくない言い訳に使われていると思います(笑)。他の都市には実際、色々な保存施設があり、それらの前例に倣(なら)っても良いのではないかでしょうか。

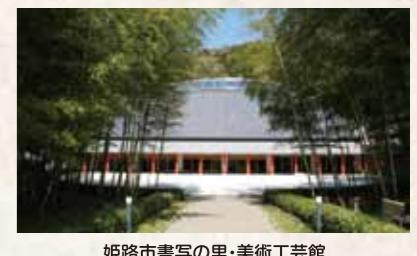
事務局： 収益ではない評価軸を、とは新しい観点ですが、飯島さんのお考えは?

補助金は乏しくなりますが、駅に近ければ企業との連携を図って、会館そのものにネーミングライツを導入するとか考えられます。

事務局： ネーミングライツという大胆なアイデアも出ましたが、飯島さんのお考えと言いますか、実行管理面、或いはそれに到るまでの仕掛けにお知恵はありますでしょうか?

美術工芸館→姫路城ミュージアム

飯島氏： 屋台会館機能という事であれば、散逸している酒井家の資料も含めて、やはり姫路城の歴史と絡める、というのは外せないでしょう。世界文化遺産・国宝姫路城の本質的価値を高める為の施設として、姫路城ミュージアムはあるべきだと思います。屋台会館機能を姫路城ミュージアムに併設というか内設する事により、祭り文化を世界に発信することは、ミュージアムの厚みを増す為にも、欠かせないものと考えます。



姫路市書写の里・美術工芸館

但し、姫路城ミュージアムは、文化庁の理解などハードルが高い事も確かです。そこで私は、姫路城ミュージアムへの内設が実現するまでの間、数年後に大規模改修が予定されている姫路市書写の里・美術工芸館を活用して、教育機能も充実させつつ、寄贈・寄託物件を預かる事はもとより、屋台会館機能を工芸館に持たせたい。

元利償還費を国と交渉

また、ミュージアム整備に当たっては、資本費に相当する元利償還費に國交付金を充てられるよう国と交渉し、運営経費を軽くしようと思います。加えて、はりま広域連携構想である8市8町連携中枢都市への国からの交付金活用も考えたいですね。

事務局： さあ、そろそろ結論を伺わねばなりません。10万9442名もの署名簿と共に「播州屋台会館(仮称)早期建設提案書」を石見市長にお出ししてから、丸15年が経過しようとしています。(最終面①参照)



平成15年10月7日
『播州屋台会館(仮称)早期建設提案書』
109,442名もの署名簿と共に提出

その間、我々屋保連はあくまで正攻法で活動して来たつもりです。少しは地域固有文化の保存・情報発信に寄与出来たのではないか、といざかん自負もあります。本当に良い結論が欲しい!

飯島さん! 市長に当選されたら「播州屋台会館(仮称)」館を作って戴けますか?

会館機能を考える事が先決

飯島氏： 評価軸は色々と考えられると思いますが、その前に会館の機能を考えることが大切なではないでしょうか。姫路城に絡めた機能を持たせれば赤字議論は出て来ず、理解も得やすく推進しやすいと思います。つまり、姫路城ミュージアムとの連携を考えています。

政教分離の問題は、崇拜の対象にならない限り、文化の観点から光を当てればクリア出来ると思いますよ。

事務局： 収益以外の評価軸を持つ、或いは機能が重要というお話をされましたので、実現させる為の会館コンセプトと実行・管理の在り方の工夫とともに話を移しましょう。

「はりま伝統文化の継承館」

清元氏： 私は姫路市の行政経験が無いので断言出来ませんが、15年前の提案書の中にも、VRや体感施設など具体的な提案がなされているにも関わらず、実現していないという事は、やはりそれなりの建設出来ない理由があるのだと思います。

私が住んでいた、香川県にはチョーサ会館がありますし、青森県には、ねぶた祭りの会館が弘前・青森・八戸など地域ごとにあります。様式も違い、各々の展示は素晴らしいものですが、どの施設も押し合いへし合いの賑わい施設とはいきません。単体では集客力に疑問符が付いています。正直、単独施設としては難しいのではないかと思います。

そこで切り口を変えて、明珍火箸や姫革など「ものづくり」の心意気を凝集させた施設と抱き合わせにする必要があるのではないでしょうか。例えば、屋台のバーツ製作工房を見せる、ものづくりを体験させるなど、播磨の伝統文化の一環に屋台文化を探り入れれば、有形無形両面での継承になると思います。

体験施設という観点からは、安全を担保した上で、退役した本物の屋台を扱いで戴いたくのも一案です。展示するだけではなく、体験して何かを作って、それをお土産としてお持ち帰り戴き、姫路の文化を体感する事で姫路のリピーター増に繋げる事を考えています。展示は本番の祭りにはなかなか勝てない。そこで姫路全体の文化の中に組み込む、という選択肢があるのだと思います。勿論、県立博物館などの周辺文化施設との連携も図らねばならないでしょう。

この屋台と祭りとを体験出来る教育機能も併せ持った施設は、その名もズバリ「はりま伝統文化の継承館(仮称)」はどうでしょうか?

駅西開発・ネーミングライツ

実現の為に、もっと大きく発想を転換するとなれば、姫路駅西開発に絡ませる事も考えられなくはないと思います。姫路城に近ければ近いほど文化庁の許認可が必要です。



JR姫路駅西周辺